厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）
分担研究報告書

大学病院外来化学療法室におけるがん治療と就労の両立に関する調査研究

研究分担者　　齊藤　光江　順天堂大学医学部乳腺・内分泌外科学研究室　教授

＜研究協力者＞
齊藤　有希　順天堂医院薬剤部
田口　良子　鎌倉女子大学家政学部管理栄養学科　准教授

研究要旨

がん治療と就労を両立に関する現状調査を外来化学療法を受けている患者 200 人を対象に実施、事業場の規模と就労形態が離職に影響を与え、両立に関する相談相手は、上司、主治医、院内相談室の順であり、産業医の役割周知は課題となった。

A．研究目的

がん治療を外来で実施中の就労可能年齢の患者の就労実態を把握することは、医療者にとり、治療設計上も重要なことである。しかしながら、これまでがん治療と就労実態の調査は、市中や職場で行われていた。医療者側からできる両立支援を立案する目的で、がん治療と就労の実態把握をし、これを困難にしている要因を探った。

B．研究方法

順天堂大学附属順天堂医院外来化学療法室で2017.3-2018.10 化学療法を実施中のがん患者(20-65才)200名を対象にアケートを実施した。男女、癌種は問わず、診断時、就労していたことを条件とした。

（倫理面への配慮）

2017年3月病院倫理委員会の承認を得た。説明同意文書を用いて説明の後、書面で同意取得したケースのみに調査を実施。

C．研究結果

非退職者は 89.5%、うち 22%が休職していた。退職者は 10.5%で、うち 50%は診断後・治療開始前に退職していた。83%は依願退職し、29%が再就職を希望していた。がん治療と就労の両立につき医療機関で相談した部署はどこかという質問に対して非退職者の「主治医」が 40.2%、退職者の「がん治療センター」が 14.2%でそれぞれ最も多いが、非退職者の 51.9%、退職者の 57.1%は医療機関のどこにも相談をしておらず、

ハローワーク等、地域の就労支援機関で
相談した患者は3%未満であった。
職場での相談窓口は「上司」が非退職者
で66%、退職者で47%であり、「産業医」
への相談人数を大きく上回った。

D. 健康危険情報　特になし

E. 研究発表

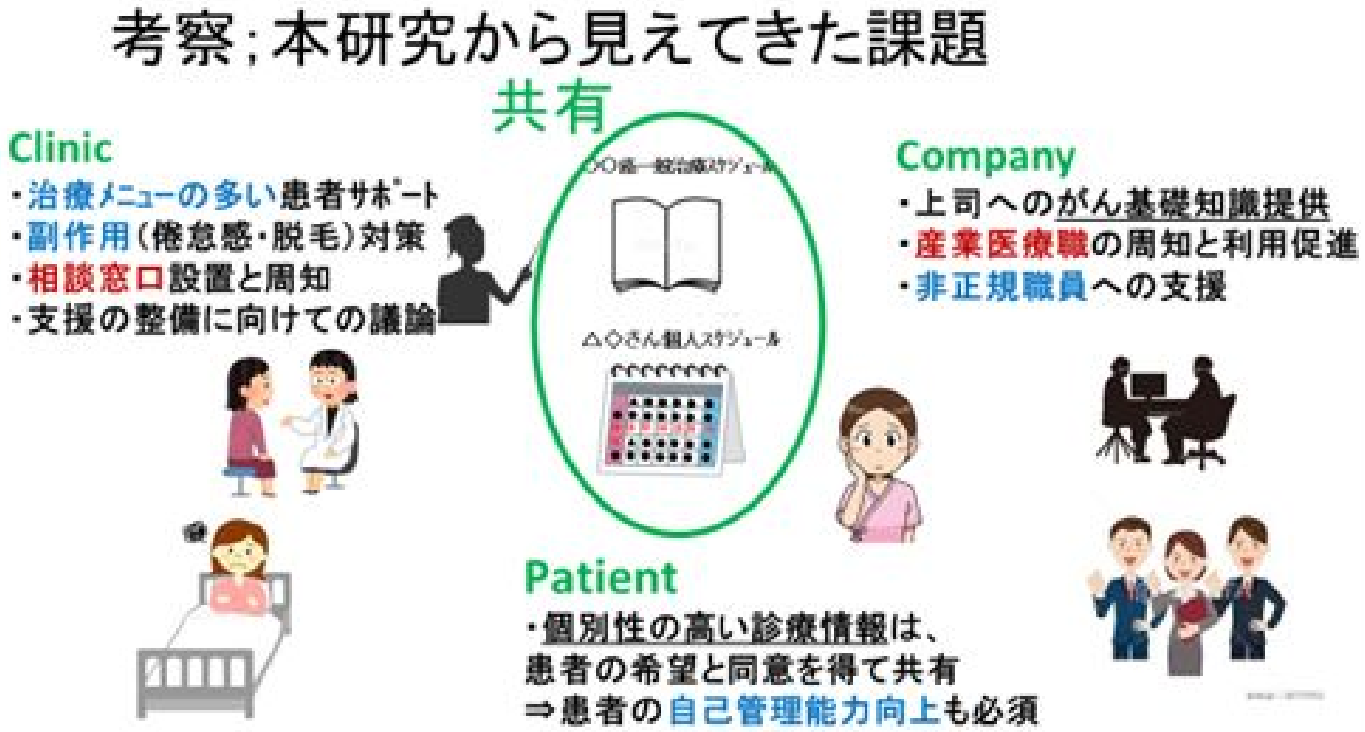
1. 論文発表 Taguchi R,Y Okude,
M Saito. What cases patients with
breast cancer to change employment?: evide
nce from the health insurance data in a me
dical facility.
Industrial Health. 2019:57:29-39.
2. 学会発表　第59回日本社会医学会
ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ過労死予防からﾃﾞｨｰｾﾝﾄﾜｰｸへ
癌と仕事の両立問題　齊藤光江 H30.7.2

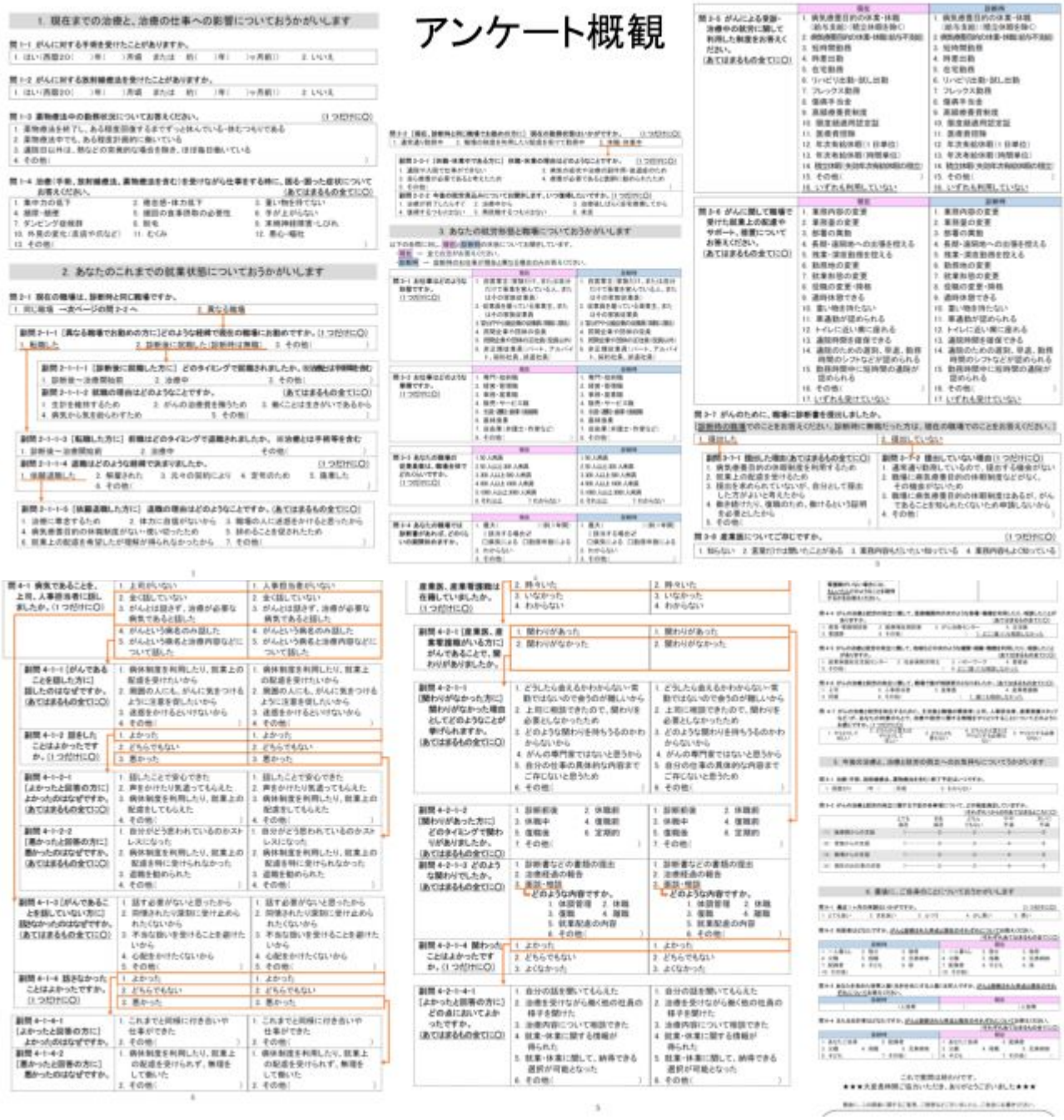
F. 知的財産権の出願・登録状況
（予定を含む。）

1. 特許取得　　なし
2. 実用新案登録　なし
3. その他　なし

結果詳細

１）治療内容が多い（化学療法以外に、手術・放射線治療も行っている）ほど、退職している人が多い。
２）休職中が約2割、非退職者の中にも復職希望をしている人が1/4強であった。
３）仕事に支障が出る症状は、共通して1位;倦怠感・体力の低下、2位；脱毛、他にしびれ、集中力の低下、重いものが持てない、悪心嘔吐、むくみが続き、非退職者に、外見の変化が多く、退職者に悪心嘔吐が多い傾向が見られた。
４）病院内で両立に関して相談したのは主治医が一番多かったが、退職者では誰にも相談しなかった人が優位であった。
５）職場での相談は、上司が一番多く、産業医に相談は極めて少なかった。
６）自身の同意のもとであっても、主治医と職場の情報交換は望まない患者が過半数だった。(退職者も非退職者も)
７）非退職者は、家族や職場の支援への満足度が高く、医療者への満足度はそれよりも低かった。
８）職場は中小零細企業が多いが、退職者で3000人以上の大企業は皆無であった。
９）非退職者は企業・団体の正社員が最多。退職者は非正規従業員が最多数であった。
１０） 非退職者には、経営・管理職が多かった。
１１） 非退職者は、過半数が産業医について知っていた。退職をした人は約1/4が知っていた。
１２） 退職をした人の職場には産業医や産業看護師はほとんどいなかった。
１３） 産業医がいても、癌に罹患後、産業医と関わらなかった人が過半数であった。
１４） 産業医との関わりでは面談が最多であった。





＜本研究に付随した活動＞

がん治療と就労の両立支援のモデルケースを募集⇒審査会⇒表彰、ホームページで紹介
https://teambcc.jp/

第3回BCC(Bridge between Clinic & Company) 架け橋大賞

最優秀賞

アフラック生命保険株式会社

【授賞理由】
社員用にポータルサイトを立ち上げ、予防から罹患後の両立支援までの様々ながんのステージに対応している。がんサバイバー社員がAll Ribbonsというコミュニティーを作りピアサポート（相談に乗るしくみ）と啓発活動をしている。病気療養のための休暇制度（リボンズ休暇と称して無制限）の充実
生命保険会社の名にふさわしい「生きるを創る」精神。

病院部門賞

地方独立行政法人 長野市民病院

【授賞理由】
両立支援ｽｰﾊﾟｰﾊﾞｲｻﾞｰが、企業向けの講座を開始後、更なる進化のために出前講座を実施するに至るというPDCAサイクルを廻している。疾患の認知が困難な企業を啓発するのが、病院の任務であるという強い使命感。診断から継続して仕事やお金のことを支援しているため、障害年金申請にも積極的。

企業部門賞

ライフネット生命保険株式会社

【授賞理由】
ナイチンゲールファンド；病気休暇の見直しを図り、未使用分の休暇を積み立て、がんに罹患した他の職員が使え、復帰後も応援金上乗せ支給などの制度開発を行っている。がんアライ部アワード；両立支援をする他社人事部を表彰する制度。開発商品と類似したネーミング（ライフ→来風、alive→アライ部など）のユニークさ。